

「ね」の必須性

中野 伸彦

The Necessity of "Ne"

NAKANO Nobuhiko

(Received September 30, 2011)

一

平叙文への終助詞「ね」の下接に関しては、たとえば、神尾（一九九〇）で、

話し手と聞き手が既獲得情報（A L I）として同一の情報を
持っている話し手が想定している場合、話し手の発話は「ね」
を伴わねばならない。（77頁）

と述べられているように、聞き手にも既に共有されていると考えられる事柄を述べる平叙文には「ね」の下接が必須であることが指摘されている。たしかに、「北川雪枝さんです」⁽¹⁾（死体 81上15）と、当人と思われる人に声をかける場合、「ね」をはずして「北川雪枝さんです」とは言いにくい。

しかし、西村（一九九三）などでも述べられ、また、中野（一九九二）でも少し述べたように、聞き手にも既に共有されていると考えられる事柄を述べる平叙文であっても、「ね」が必須でない場合がある。本稿では、どのような場合に、聞き手にも既に共有されていると考えられる事柄を述べる平叙文への「ね」の下接が必須でなくなるのかについて述べていく。

二

先ず、あいさつとして、聞き手も知っているであろう・思っているであろう事柄を述べる場合、「ね」を下接させないことが可能になることがある。

たとえば、

S E 電話が鳴る

初江「船久保です——あら、北沢さん」

(略)

初江「お寒うございます！」（冬 128・6⁽²⁾）

のように、出会った時のあいさつとして（右の例は、実際対面しているわけではなく、電話での話し始めのあいさつであるが）、気候について言う「お寒うございます」は、内容としては、聞き手もそう思っていることであるが、「ね」をつけずに言うことができる。同様に、「お暑うございます」も、「ね」をつけず言うことが可能であろう。ただし、丁寧さの高い形をとる場合に限るようで、「寒い（暑い）です」⁽³⁾「寒い（暑い）ね」と言う場合には「ね」ははずせない。次の例も、気候について、出会ったときのあいさつとして述べるものだが、たとえば、「結構なお天気でございます」⁽⁴⁾「ようやく暖かく

なつてまいりました」のように丁寧さを高くすれば、「ね」は必須でなくなるかもしれないが、挙例の形では「ね」は必要である。

私と彼の視線が合った。

14 「いいお天気ですね」と相手が声をかけてきた。(夢遊 183)

外に出ると、渡辺七郎氏が庭で植木の手入れをしていて、ちよつとちよつと、と現役作家を呼びとめた。ようやく暖かくなつてきましたねえ、ねえ、先生、お願いしたいことがありますしてねえ、どうです、ちよつとお寄りになりませんか。(文章 212・15)

また、次のような、謝罪・感謝・ねぎらいのあいさつとして、謝罪すべき事態・感謝すべき事態・ねぎらうべき事態を述べる場合も、話し手としては、聞き手も「待たせられた」「世話をしている」「疲れた」と思っているものと想定して語っていると考えられようが、「ね」は必須ではない。

「お待ちせいたしました、お嬢様」

運転席から飛び出してきたのは、夏だというのにダブルのブラックスーツを暑苦しく着こなした銀縁眼鏡の男。(謎解

211・18)

健吉「どうも孫がいろいろと世話になっていきます」(冬 300・7)

「土江田さん、今、マスコミから逃げましたね。お疲れさまです」(Story 405・9)

次も、これに類する例である。(この、謝罪・感謝・ねぎらいのあいさつ場合は、非丁寧体の例もあるように、丁寧さの高さは関係しないようである。)

健吉「あ、いらっしやい」

初江「おじゃましております、今日はまたいろいろお世話になります。(略)」(冬 194・5)

「おじゃました」

「あら、もう帰るの」(ゆっくり 73・12)

「御無沙汰しました」

季子は座蒲団を脇にやつて、お辞儀をする。(沿線 169・14) あや子「どうもこのたびは、いろいろご迷惑をおかけいたしました」(冬 443・5)

「今朝ほどはお騒がせしました。お詫び申します。(略)」(ゆっくり 174・2)

「先ほどは、とんだ痴態を見せてしまいました」

赤井は悪びれた様子も恥ずかしがる様子も見せずに、しれっとした口調で云つた (Story 414・14)

「で、あなたは？」

そこで胆武が、文字通り頭の天辺から爪先まで刀城言耶を繁々と跳め回したので、

「申し遅れました。僕は——」(山魔 253・9)

舞鶴歌は現れた。雅は石投げが報われたような気がした。(略)

「ごめんさいね。遅くなっちゃった。(略)」(夢遊 86・6)

「センパイ、お世話になりました！」(ゆっくり 94・13)

「(略) 三年生の一年間委員をしてくださった方、どうぞお立ちください」

先生は起立した四人の母親の一人一人に「ご苦労さまでした」と声をかけ、母親たちも拍手をした。(ゆっくり 11・1)

「俺はね、前に『無左志』に乗ってたんだよ。『無左志』が沈んだときも俺は居た」

(略) 珍しい動物に遭遇したような気持ちになった俺の頭には、自分も「無左志」に乗っていたんですよ、であるとか、大変ご

苦労をなさいました、だとかの文句が幾パターンか浮かんで出たが、どれも今の状況にはそぐわない感じがし、ただ黙っていたら、向こうがまた喋り出した。(神器 上 35・10)

「あなたの店のご主人、本当にお気の毒です」少女は東京タワーの模型を凝視したまま言葉をつづけた。「あんな事件に巻き込まれてしまった」(Story 404・6)

次の「(お) 久しぶり(です)」「お久しぶりございます」も、久しぶりに出会った時のあいさつだが、「久しぶり」であること・「久しぶり」ことは聞き手も了解していると考えられる。

「ああ、おひさしぶりです。平岡さんもおかわりなく」(砂 58・3)

「兄貴、久しぶり」(重力 36・11)

「お久しぶりでございます。夢ではなかったんですね」(ゆき 29・13)

形としては「久しぶり」「お久しぶりです」「お久しぶりでございます」以外にも、「久しぶりです」「お久しぶり」「お久しぶりでございます」などの形もあるだろうが、次のような「久しぶりだね」の「ね」をはずして、「久しぶりだ」と言うことはないかと思われる。

私の前に熱いお茶を置いた板前が、ひさしぶりだね、と言う。

顔を上げると島さん。(ゆつくり 212・12・13)

あいさつの場合、どこまで、聞き手にも共有されているものと考えてよいかわかりにくいところもあるが、「ね」の必須性が消える場合の一つとして挙げる事ができる。

三

「くだろう」「け」の形での確認要求の平叙文は、聞き手にその内容が共有されていると考えられる場合でも、「ね」は必須でない。

「もしもし、鐘ヶ江さん？ あんた駐車場の鐘ヶ江さんだろ？」

おれだよ、おれ(略)(王様 152・7)

遼介「いやあ、まだ東京にもああいいうちがあるんだなあ。ほ

らよく落語にあるでしょ。『ハツツァンクマさん』の。『さ

あ、お上り、遠慮しないで、ズーンと奥へ、ズーンと奥

へ』っていうと、アツという間に裏口へ出ちまうってやつ。(略)(冬 470・9)

「で、倉本さん、根岸文江の死体が発見されたのは、それから三日後、でしたっけ」

「さようでございます」(水車 112・1)

これに対して、「くだろう」「け」の形以外の確認要求の平叙文は、聞き手にそのことが共有されていると考えられる場合、「ね」が必須になる。次の文末の「ね」ははずせない。

「(略) 土曜日の午後三時にママと一緒に来るんだよ」

「わかりました。三時ですね」(夢遊 140・8)

ただし、次の二つの場合には「ね」がはずれうる。

一つは、次のような、話の前提として、聞き手も知っているはずの事柄に聞き手の注意を向けさせる意味で言う場合である。

「教えてくれ。君は放火が行われた後、あの現場を去った。そうだろう？ でも、君の目的は春を調査することだった。(略) それなら、まだ残っているべきだったんじゃないのか？ (略)」

(重力 225・15・16)

「教えてほしいんだ。君はこの間、東北ゼミナールの放火の時、怪しい男を尾行した、と言った。でも放火犯が春だとしたら、そいつはいつたい何者だったんだ」(重力 402・15・16)

編集部 円城さんは、すでに〈文学界〉でも「オブ・ザ・ベリースポール」と「つぎの著者につづく」の二篇を発表しています。

前者は芥川賞の候補になりました。SFと純文学で明確な書きわけはしていますか？

円城 ジャンル分けという意識はあまりないんですが、雑誌にとなると、やはりその雑誌のカラーに合わせてようとは思いますが。

(伊藤 177下17・19)

「どうしてお前は、そんな方法で脅かそうとしたんだ。『この家を、出ていけ』——そこにはそう書かれている。それが本当

に、おまえの望みなのか」(水車 301・18)
 のように、ある事柄に対する聞き手の見解なり詳しい説明なりを聞くための前提として、その事柄への注意を喚起するものや、

「どういう気の迷いか、こうしてあなたをここにお泊めすることになった。一旦お招きした以上は、出ていけなどとは私も云わないが、ある程度の節度は守ってもらおうよう、ここでお願いしておきましょう」(水車 78・16)

「どうです細見さん、彼と一度会ってもらえませんか？ 彼はもちろん『夢幻』は全部読んでいますし、細見さんは彼の『白骨鬼』を気に入ってくださった。おそらく話が食い違ふことはないと思います」(死体 38・12)

「よく考えてごらん下さい。あなたは沢木耕一を殺し、あたしは神原梨矢子を殺した。お互いに相手の弱みを握っているわけよ。あたしたちさえ口をつぐんでいれば、警察につかまる心配はないわ。(略)」(研究 242・19)

「——ご存じのとおり、この一ヵ月ばかりの間に、わたくしの家からむ人間が、二人まで、殺人という異常な事件の被害者となる、ということがございました」(略)

「このことで一時は、この会を中止するか、不祥事の責任をとり自粛するか、というような協議もなされたのでありますが、結局、またと折のない目出たい会であるからとのことで、かくのごとく開催いたすこととなりました。これは、父喜左衛門の希望もあつてのことです」(絃 下 185・1・2)

のように、話し手が聞き手にある主張をする、その根拠・経緯説明として注意喚起するものなどがある。

「ね」のついた形も、

「あのう——さつき、殺したいと思つたことが一回だけあると、そうおっしゃいましたね」

「はい」

「もしおたずねしてよろしければ——誰です、その人というのは——？」(絃 上 119・11)

「じゃあ、もう一つ訊くが、あなたは二階に上がつて、寢室のガスを止めたと言つたね。では、どうして、あなたの指紋がガスのコックについていないんだね？」(開け 202・6)

のように使われるが、ある主張をする、その根拠・経緯説明として注意喚起する場合には、「ね」はつけにくいかと思われる(右の「ね」の下接した例は、いずれも、「ある事柄に対する聞き手の見解なり詳しい説明なりを聞くための前提として、その事柄への注意を喚起するもの」である)。逆に、次のような、単に事実を伝えるにあつての前提を言う場合は「ね」がつく方が自然なように思う。

「どこかにお勤めだったんでしょうか？」

「貫井さんですか？ ええ、駅前、スパーがございますね。あそこへ勤めてましたね。(略)」(開け 258・17)

「くだらう」「くけ」の形以外の確認要求の平叙文で、聞き手にそのことが共有されていると考えられる場合、「ね」が必須にならないもう一つの場合は、(聞き手も見ている)その場の状況から、あるいは、その場で聞き手が言つたことから、わかつたこと・知つたことを確認する場合である。聞き手にも共有されている内容として述べられていると考えられるが、この場合も「ね」がつかないことが可能である。

そんな格好のあたしを門のむこうの利満は驚き半分、嬉しさ半分のまなざしでしげしげと眺めた。

「アレエ？ 今日はいたんだア！」(ラヴ 18・7)

明け方、早い時間に彼女が起きた。その気配で目覚めるほど彼の眠りも浅かつた。

彼は座布団を枕に拝借し、部屋の隅で横になっていた。彼女が起きたので起き上がる。

彼女は悲鳴でも上げるかと思つたが、黙つて彼を見つめていた。

「……驚かないんだ」(Story 188・16)

あわただしい感じの足音が背中に聞こえたことはわかつた。が、はじめは気にもとめなかつた。やがて「おーい」という声が聞こえた。女の声だつた。(略)わたしは立停つてふり返つた。やっぱり彼女だつた。

「いやに急ぐんだ」

杉岡鈴子は十分に距離をつめてから、わたしにそういつた。

「急いではいないけど、長くいても意味がないしき。それに仕事もある」(砂 243・8)

「あれ、春は来ていないんだ?」

「今日は来てないな」

「いつもは来る?」

「次男は大抵やってくるが、長男はやってこない。それが、今日は逆だ」(重力 243・12)

「知つてる? あの焼く匂いにも色々あるんだよ。昨日私が出来たときは揚げパンのような匂いがして、シナモンの香りがすぐしたから、これは振りドーナツでも作つてるんだわつて思つた」

「そんなの分かるんだ?」

「うん。食パンとか普通のやつだと、香ばしい中にちよつとだけ酸味のある感じがして、それから濃厚なバターの香りがするの」(ラジオ 88・8)

「私が沖縄でフィールドワークしてたのは、宮古島にいるユタと呼ばれるシャーマンなんだけだね。彼女たちが共同体の中でどのような役割を担つて存在しているのかについて、調べてたのよ」

(略)

「シャーマンつて、今でもいるんだ?」

「存在するのよ。(略)しかもね、一九九〇年代に入つてから増えているの。ネオ・シャーマニズムの時代、なんて言われているんだけどね」(コンセント 138・9)

「ちがうのよ。わたしのお祖父さんは長老会議の構成員の一人だつた。だからよく聞かされたの。」

「いい家なんだ。かっこいい。」

「まあね。わたし自身はしがない出戻りの身だけど(マシ

アス 524・13)

遼介「七十過ぎてても働いてる人間もいるんだぞ」

健吉「四五十は洩たれ小僧!」

直子「お兄ちゃんなんか、まだハナも出てないわけだ」

健吉「そういうこと、そういうこと!」(冬 144・4)

「ということは、ゆかりは三十になったら自分がどうなつてるかとか考えたりするわけだ」私は言った。

「ていうか、まわりがけつこう心理療法士になるとか、将来のこといろいろ考えてるから——」

「つまり、不況は学生の将来を奪うと同時に現在も奪つてしまったわけだ」(カンバ 388・12~16)

「テレビ局の男がこう訊ねたんだ。『このお店の人は必死に働いてお店を経営しているのですよ。壁を塗りなおすのにどれくらいお金がかかると思っているんですか?』と。悪くない理屈だつたと思う」

「平凡だけど、悪くない」

「そうしたら、その若者がこう言つたんだ。『店の壁に描かれるのが嫌だったらガードマンでも雇つて、監視させればいいんだよ。本当に嫌ならね。守ろうとしないでやられるのは自業自得だつつのよ』」

「自業自得という言葉の使い方が違うつつのよ」

「あまりのことにポリウムを上げてしまった」

「おまえは怒ったわけだ」

「理屈にもなっていない理屈をこねる若者は嫌いだ (略)」（重
力 41・7）

多く、「のだ」あるいは「わけだ」が文末にくるが、次のように
そうでない場合もある。この場合は、最初の例（年下の男の子だ）
のように文末が「だ」である場合以外は、かえって、「ね」をつけ
た形が使われない。

「あんた、まだ高校生なの」

「そうだけど、聞いてなかった、佐藤くん」

(略)

「高校生か。じゃ、アタシから見れば、年下の男の子だ、あん
た」

それから、彼女はまた僕の頭の前からつま先までなめるよう
に見て、ふうーんと説明に困るような奇怪な声を上げた。

(略)

「でも、高校生だとか、年下だとかいったことは、関係ないだ
ろう」

僕の言葉に彼女はニコニコ笑って、

「そうだよ、うん。あんた老けてるからね」

と言い、もう一度僕を見て、老けてるなあ、と繰り返した。

(春 78・9)

『虐殺器官』と『ハーモニー』って、タイトルのイメージ
からしても対照的ですよ。

伊藤 ブログを巡回したら、『虐殺器官』を捨てられちゃっ
た、っていう十代の男の子がいたんですよ。お母さんが怖くなっ
て捨てたらしい (笑)。ああすいません、ごめんなさい、もっ
と次は穏やかなタイトルをつけます、と。(笑)

で、『ハーモニー』になった。(笑) (伊藤 185上16)

「君、もっと順序だてて話してくれたまえ。つまり、この離
れに変な客が泊っているのだね」

(略)

「あたしが離れまでご案内したのですが、あたし、そのとき、
ちよっと粗相をいたしましたして、お客さまのトランクを落として
しまったのです。その拍子に、トランクの中身が、あたり一面
に散らばりました。あたし、それを見て、ギョッと立ちつくし
てしまいました。」

なんと、友禅の振袖と、お下げ髪のかつらが転がっていたの
ですよ。男の方の荷物の中に、女ものの着物がはいっていたの
でございますよ。ですが、そのときのあたしは、アアあとから
連れの御婦人がいらっしやるのだわ、秘密の逢引きの用意なの
だわ、と一応納得しました」

(略)

「さて、その晩、夕飯のお膳を持って離れにまいったときのこ
とです。お部屋の奥の窓ぎわに、振袖を着た方が坐っていまし
た。あたしはそれを見て、アラ、この方がお連れさんねと思い
ました」

「ところがそれが、先の男だった」 (死体 18上17)

「……といつても、まだお付き合いをはじめて、ほんの一ヶ月
程度なんです。出会ったきっかけは、父が支援者たちを集めて
開いたパーティーでした。野崎さんの会社の社長さんが、父の
後援会の役員をなさっているのですが、その社長さんが急遽
参加できなくなったとかで、それで野崎さんが代理でいらっ
しゃったのです」

「なるほど。そのパーティーがきっかけとなって、二人は付き
合うようになった」

「はい。その場でメールアドレスの交換をして、その数日後に
彼のほうから食事のお誘いがありました」 (謎解 185・11)

なお、「ね」のつく場合とつかない場合を比べてみると、文末に「のだ」がある場合、確認しようとする内容が、予想外で、話し手にとって驚きのあるものである時に「ね」のない形が、そうでない時に「ね」のある形が使われるようである。

たとえば、次の例は、小学校の担任の先生（中山先生）に関する問題についてどのように対応を進めて行くべきか、クラスのPTA役員たちが意見を述べている場面である。学年委員の役にある話し手の洋子が、他の役員の意見を受ける形で、自分が担任の先生に言いに行くのがよいという結論になることを皆に確認している。「私が先生に言いに行くべき」ことを、そうなるべきところと思って述べているので、驚きのある場合ではない。したがって、「ね」をはずしていくのだと考えられる。一方、「ね」のつかない形で用いられている例を見ると、挙げたように、そんなことがあるのかという驚きが推測できる場合に用いられている。（ただし、「のだ」が文末に来る以外の例については、例を見ても、必ずしもそのような限定はかかっていないようである。）

「ねえ、こういうことって、私たちがアレコレ気をもんでも仕方ないんじゃない。来月の授業参観のあとにでも、直接中山先生から説明してもらおうことにしたら」明子が即断即決というように言った。

「そうですね」満子が考え考えた。「そうしていただくからと大石さんたちに伝えて、直接校長先生に言うようなことは控えていただくのがいいと、私も思いますけど」

「やっぱり私が先生に言いに行くべきなのね」洋子が再びため息をついた。（ゆつくり 80・2）

次の例は、「ね」のついた形が用いられた例だが、「ね」をはずして、「大友さんって気がきくんだ」のようにすると、それまで、話し手は、聞き手（＝「大友洋治」）が「気がきく」とは思っていないかかったというような意味合いになって、若干失礼なもの言いになるよう

に思う。

店の方を見た香世子の横顔に、タバタイと書いてあったので、洋治は二十枚買ってきて、香世子に袋をもたせた。

香世子は小気味いい音をたてて、手焼きせんべいをかじった。洋治も一枚もらって食べた。

「大友さんって気がきくのね。けっこう女の子にモテるんじゃない？」（クラス 139・16）

また、「ね」のついた形は、

「まあ、百億円ベンチで眠っていた方も一緒？ 仲良しになっただけです」(Story 387・11)

「あなたは『たいもん商会』でお店番をされましたね。私のことは覚えてますね？ 先日、そちらで東京タワーのプラモデルを買った者です」

「覚えている。ひさしぶりの客だったから」

「お互い、顔見知りというわけですね」(Story 404・16)

のように丁寧体で言われることもあるが、「ね」のつかない形は、挙例のように非丁寧体でのみ使われる（これは、文末の形にかかわらず該当する）。次は、前後では丁寧体を使っている話し手から聞き手への発言の中で、「ね」をつけない確認要求の平叙文は非丁寧体になっている例である。

雀部（略）SFに興味を持たれたのはいつ頃からでしょう。

伊藤 SFと意識せず読んでいたのは、筒井康隆さん、小松左京さんです。（略）「これがSFか」と意識して読んだのは『ニューロマンサー』が初めてです。中2だったかなあ。

雀部 中学生で、サイバーパンク初体験なんだ。

小松先生、筒井先生と『ニューロマンサー』とは、相当違うと思うのですが、最初に読まれた時の感想はどうだったのでしょうか。（伊藤 157下3）

四

その場で見聞きしたことについて、話し手の感想・感じたことを述べる場合、「ね」をつけずに言われることがある。

直子「リッパース・ハウス、あ、この店、アンアンだかノンノに出た」

あや子「なんなの」

直子「デイスコ」

あや子「どういうイミなの。リッパースって」

遼介「切り裂くってイミじゃないか。ほら、ジャック・ザ・リ

ッパー」

健吉「人殺し」

あや子「なんだか凄そう」(冬 274・2)

右は、デイスコの名前の意味について聞いた話し手が「なんだか凄そう」という感想を述べているものである。この場合、この感想は、まわりの聞き手たちにも共有されているように思われるが、「ね」をつけないことが可能である。次も、同様な例である。

日出口「(小さく菊男に) ね、(あの人たち) かまわないから、

やらない(カット)」

菊男「——(いいよ)」

エミ子「ねえ、カットにきたんじゃないの」

日出口「ううん、あたしね、こんどの新作発表会に出そうかなって、そう思って、やりにきたの」

エミ子「なんかさ、おじやまみたい」(冬 227・9)

あや子のハミングが聞こえる。

直子「お母さん、浮かれてたでしょ」

菊男「——」

直子「自分がお見合いするみたい」(冬 155・1)

「先生、とつても憂鬱そう」

「そうだね。どうしてだろう」

「スピカが慰めてあげる」(夢遊 200・8)

「とにかく今日は家にいるわ。手伝うことがあったらやるわ」

「珍しい」(沿線 54・10)

「これを聞いて、なにか気づかなかったか」

「そうさな。とにかく油紙に火がついたように、よくしゃべる

やつだ。このテープでも、二秒とは沈黙が続かなかっただろう」

(研究 170・13)

「額縁ごと、なくなっているのです。しかも、勝手口のドアが

開いてしまってますね」

「じゃあ……」

「盗まれた、と考える他なさそうです」

「そりや大変だ」(水車 197・16)

「(略)そこで犯人はどのような行動に出たか——もう、お判

りですね、お嬢様」

「判ったわ。犯人は被害者のズボンを脱がせたのね。長すぎる

裾を隠すために」

「さすが、お嬢様、慧眼でいらつしやいます」(謎解 204・15)

次は、まるっきりのその場ではないが、それまで銭湯に一緒に入っ

ていた、その時見たことについて言っているもので、これも同様な例と考えられる。

入口の方で、にぎやかな声がして遼介、初江、公一が銭湯から帰ってくる。

(略)

遼介「いや、それにしても、いい体格だ、もう、こっちは劣等

感で」(冬 338・8)

見聞きして、すぐ感じたことに限るようで、次の、渋滞に巻き込まれて、しばらく経った状況で言われた例のように、その状況の中であれこれ考えた上で言う場合には、聞き手もそう思っていると思えば、「ね」が必要である。

〔沿線 82・9〕

「(略) ええと、なんの話でしたかな?」

「葉巻の話です」

「違います、警部。家族会議を開いた話です」

「ああ、そうでした」(謎解 57・3)

「だいたい、あたしのどこが節穴だつていうのよ! いっちゃなんだけど、あたしは子供のころから目だけはいいのよ!」

「そうでございました。節穴は確かに言い過ぎでございました」(謎解 75・14)

「前に話したでしょう。不労所得があるんですよ」

「ああ、そうでした。そういう話でしたね」(ハマー 289・9)

「とにかくそこにおいて。僕もすぐに行くから。動いちゃ駄目だよ。人目のあるところにおいて」

わかった、と電話を切りそうになり、頭の中にふと違和感が芽生えた。その違和感のものをしばらく探つてから、私は思い当たった。

「ちょっと」と私は声を上げた。

「何?」と電話を切りかけた秋山が応じた。

「ここがどこだか、わかっているの?」

秋山が一瞬、言葉に詰まった。

「ああ、そうだよね。聞いてなかった。そこ、どこ?」

嘘だ。そう思った。動いちゃ駄目だよ。人目のあるところにおいて。秋山は、たつた今、そう言ったのだ。私が、今、人目のあるところにいることを秋山は知っている。(Story 635・9)

次のように「そうでしたね」と言った場合は、失念していたとも失念していないともとれるが、「そうでした」と言えば、失念していたのを思い出したという解釈に限定されてくる。

「どこかで見たことがあるんです。うちの初代は福井の出でしたから」

「そうでしたね。(略)」(ゆき 17・9)

八

以上、聞き手にも既に共有されていると考えられる事柄を述べる平叙文への「ね」の下接が必須でなくなる場合について述べてきた。種々の場合があり、必ずしも、こういう場合とまとめて言いにくい、少なからぬ場合に「ね」が必須でないことが確かめられたと思う。

〔注〕

(1) この現象については、平叙文においては、「ね」を下接させないことで、「叙述内容を、聞き手に対して、」まともに獲得させようとする姿勢が、必然的に現われてしまう」というような形でとらえるべきと考えるが、これについては中野(一九九二)で述べたところである。このとらえ方でいけば、本稿で以下述べることも、「ね」を下接させない平叙文でも、「叙述内容を、聞き手に対して、」まともに獲得させようとする姿勢が、必然的に現われてしま」まわらないのは、どのような場合かということになる。

(2) 資料からの引用にあたっては、書名(略称)、頁数、行数をこの順で記す。用いた資料については、論文の末尾にまとめて記してある。なお、引用に当たって、ふりがなは省略した。

(3) 「お早うございます」の場合は、既に「来るのが早い」というような意味内容は薄れて、平叙文というよりは一つの感動詞のようになっていると見るべきであろうか。

「お早うございます」

左右田が声をかける。

「お早う。早いね」(絃 下42・6〜8)

似た例でも、右の「早いね」のような場合は「来るのが早い」という実質的な意味も残っており、また、「ね」もはずせない。

お祝いの席で述べる「おめでとうございます」は、まだ「めで

たいことだ」という意味内容を残しているかと思われ、とすれば、聞き手にも既に共有されていると考えられる事柄を述べる平叙文と言えるかと思う。

「こちらこそ初めまして、影山と申します。本日はおめでとうございます」(謎解 134・4)

- (4) 中野(一九九六)でも述べたが、聞き手にその内容が十分共有されていないものとして、改めて聞き手にそのことの認識を獲得させようと言う確認要求の平叙文にあつては、「くだろう」「くけ」の形でなくても、「ね」の再接は必須ではない。

「前にここにマグダ・イオナって娘がいたでしょ」
「覚えていないな」

「一度試したはずですよ。小柄で、胸の大きな子。メルチョー
ルの出身」

その一言で大統領はその娘のことを思い出した。(略)

「ああ、あれか」(マシアス 67・4)

- (5) 西村(一九九三)で挙げられている、次の例(A…インタビュー
ア、B…野球チームの監督、高校野球の中継にて)は、今述べているタイプに属するものかと思われる。

A…(Bさんの) お話の中で投手の体を大切にしていこうと
いうのがありました。

B…今年はね、……(以下略)。

なお、同じく西村(一九九三)で、「10人足らずの小さいクラスでの日本語学習者によるスピーチの中の発話」の「日本には自動販売機がたくさんありますね」という表現が、「押し付けがましく、失礼な感じを抱かせた」と述べられている。この表現が発せられた文脈が不明なのでなんとも言いがたいが、「話し手が聞き手にある主張をする、その根拠・経緯説明として注意喚起するもの」に該当するためと考えることもできそうに思う。

- (6) このタイプの文については、聞き手に向けて確認を求めるとい

うより、話し手の中で納得するという面が強いかもしれない。このタイプ文の「のだ」文について、メイナード(一九九七)では「はっきり相手に問いかけることなく、半分自分に、半分相手に向けて確認する印象を与える」(185頁)とし、吉田(一九八八)では「聞き手に関することがらについて聞き手本人の目の前で自ら納得させて、そのことを以て聞き手への確認ともする表現である」としている。また、塚原(二〇〇〇)では「聞き手をはつきりと意識したものではなく、聞き手に対する働きかけが強くない」としている。しかし、文末に「？」を付された例もあり、次のように、「聞いた」と表現された例もある。確認要求の平叙文の一つとして述べておくこととする。

徹は、帰りの電車の時刻を気にしながら、そろそろ、本題に入ろうと、重い口を開いた。

「父さん、いい歳して、突然駆け落ちだなんて、一体、何が、あつたんです？」

(略)

明美が、真顔で徹に聞いた。

「駆け落ちしたんだ？ 私たち……」(中吊 166・7)

なお、このタイプの文の「のだ」文が、神尾(一九九〇)の規定からはずれることについては、須賀(一九九五)にも指摘がある。「若い女性アナウンサーが熱心にヒマワリの絵を描いている小学生をのぞきこみながら、「ふーん、ヒマワリが好きなんだア」と言ったりする」例を挙げて、「必ず必要とされるはずの『ね』もしくはその変異形」が「単に語尾を引き伸ばしただけの『ア』」で代用されてしまっている」とされている。(ただし、少なくとも現状においては、必ずしも「のだア」と引き伸ばさない形でも使うと思われる。)

〔参考文献〕

- 神尾昭雄（一九九〇）『情報のなわ張り理論』（大修館書店）
 須賀廣（一九九五）「気になる表現「…なんだア」」（『言語』第24巻8号、〈言語空間〉読者のページ）
 塚原真紀（二〇〇〇）「理解・把握を示す「そうなんだ」——話題展開の視点から——」（『日本語教育学会秋季大会予稿集』）
 中野伸彦（一九九二）「ね・よ」の働きについて」（『山口大学教育学部研究論叢』第41巻第一部）
 中野伸彦（一九九六）「Ⅲ型の確認要求の平叙文と終助詞「ね」——江戸語と現代語——」（『山口大学教育学部研究論叢』第46巻第一部）
 西村史子（一九九三）「『同意を求める発話』における「ね」と「でしよう」の機能」（『広島大学教育学部紀要』第二部第42号）
 泉子・K・メイナード（一九九七）『談話分析の可能性』（くろしお出版）
 吉田茂晃（一九八八）「ノダ形式の構造と表現効果」（『国文論叢』第15号）

〔資料〕

本稿で用例を引いた資料は次の通り。傍線部が引用に当たって記した略称である。

- 岡嶋二人『開けっぱなしの密室』（講談社文庫）・栗本薫『絃の聖域』（講談社文庫）・伊藤計劃『伊藤計劃記録』（早川書房）・山田太一『沿線地図』（角川文庫）・佐藤正午『王様の結婚』（集英社文庫）・道尾秀介『カラスの親指』（講談社文庫）・保坂和志『カンバセイション・ピース』（新潮文庫）・田中雅子『クラスメイトに手を出すな!』（新潮文庫）・逢坂剛『空白の研究』（集英社文庫）・田口ランディ『コンセント』（幻冬舎文庫）・中町信『空白の殺意』（創元推理文庫）・歌野晶午『死体を買う男』（カッパノベルス）・伊坂幸太郎『重力ピエ』

ロ』・奥泉光『神器』（新潮文庫）・綾辻行人『水車館の殺人』（講談社文庫）・新潮社ストーリーレーサー編集部編『Story Seller』（新潮文庫）・関川夏央『砂のように眠る』（新潮文庫）・吉本ばなな他『中吊り小説』（新潮文庫）・東川篤哉『謎解きはディナーのあとで』（小学館）・ウィリアム・モール（霜島義明訳）『ハマーズミスのうじ虫』（創元推理文庫）・吉村萬志『ハリガネムシ』（文春文庫）・川西蘭『春一番が吹くまで』（河出文庫）・向田邦子『冬の運動会』（新潮文庫）・金井美恵子『文章教室』（福武文庫）・池澤夏樹『マシアス・ギリの失脚』（新潮文庫）・島田雅彦『夢遊王国のための音楽』（福武文庫）・三津田信三『山魔の如き嗤うもの』（講談社文庫）・泡坂妻夫『ゆきなだれ』（文春文庫）・干刈あがた『ゆっくり東京女子マラソン』（福武文庫）・鈴木清剛『ラジオデイズ』（河出文庫）・岩井俊二『ラヴレター』（角川文庫）